

<b>Title</b>	「不由師授不由家學」：尾藤二洲の学問観・教育観(6)
<b>Author(s)</b>	石津, 靖大
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 11(1): 144-162
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=605">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=605</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

「不由師授不由家學」

——尾藤二洲の学問観・教育観（6）

石津靖大

この度は、「静寄軒集序」<sup>（せいきけんしゅうじよ）</sup>、「與藤村合田二老人書」<sup>（むつむらこうだんじにあらたなるしよ）</sup>、温恭合田先生之墓を基にして、尾藤二洲<sup>（びとうじゅう）</sup>（延享四—文化一〇）の学問観・教育観に就いて、試みに雑記して見た。其れ其れの資料に始めて接した時は、

「静寄軒集序」が昭和五〇年（一九七五）、「與藤村合田二老人書」が昭和四〇年（一九六五）、温恭合田先生之墓が平成二年（一九九〇）であつた。温恭合田先生之墓とは偶然出会つたが、真逆現存して居るとは思つても見なかつた。筆者の中で仮死状態にあつた前二者が、後者との偶然の出会いに因つて、はつと生き返つた気がした。

題の「不由師授不由家學」は、八〇〇字に余る些か長い越翼の撰に成る「静寄軒集序」文中に有る。この句は、一見何の変哲もない常なる事と思える。併し、寛政異学の禁令と云う幕府の文教政策が示された翌年（寛政三、一七九一）、幕府儒官の召命を受けた正学派朱子学者二洲にとつて、仮令没後の遺稿集に寄せた弟子に由る序文と雖も、「二洲藤先生則不由師授不由家學」は、異なる事に解される危さを少しも含んで居なかつた、ので有るか。以下の雑記は、表題の句を巡つて、稚拙な推理をした丈の作なるもので、投稿するのを最後まで

躊躇つた。若しも読者が有るなら、曖昧模糊とした雑述であるので、堪えて意を汲んで頂けると、誠に有り難い。

一、「静寄軒集序」

本節では、静嘉堂文庫所蔵の写本『静寄軒文集補寫』<sup>（ほしよ）</sup>に在る「静寄軒集序」に就いて、雑記する。

二洲の全集に相当するものには、『静寄軒集』と『静寄軒文集』の二種が在るとされて居る。前者は全て写本として伝えられ、後者は版本である。国立公文書館内閣文庫所蔵の写本『静寄軒集』<sup>（本集一七卷）</sup>は、目録に献上本と記してある。この写本は、『正學指掌』<sup>（せいがくしじやう）</sup>が収録されて居ないが、二洲の全集と見る可きものである。静嘉堂文庫所蔵の『静寄軒文集』<sup>（本来は一二二巻）</sup>は、木活字本である。表紙の題簽は静寄軒文集となつて居るが、柱刻は拙修齋叢書静寄軒集となつて居る。この版本には、『素餐録』<sup>（そさんろく）</sup>その他の単行本として出版されたものが収録されて居ないので、二洲の全集と見ることには躊躇いがある。

『靜寄軒文集補寫』は、奥書に「明治四十四年一月以大阪圖書館贈寫」と記してある。不思議なことに「靜寄軒集序」は、この『靜寄軒文集補寫』には在るが、管見では未だに写本『靜寄軒集』で見た事がなく、版本『靜寄軒文集』には無い。

「靜寄軒集序」の後半に「侯則慨然命有司梓其遺集而行之於世先生嘗授翼以校讐之事因與池誠中共執其役及刻成諸友亦以遺命翼序之」、即ち「侯則ち慨然として有司に命じ、其の遺集を梓して之れを世に行う。先生嘗て翼に校讐の事を授く。因つて池誠中と共に其の役を執る。刻成るに及んで、諸友亦た遺命を以て翼をして之れに序せしむ」と有るが、『靜寄軒集』は板刻されず、写本としてのみ伝えられた。「靜寄軒集序」の存在は、忘れられて居る又は知られて居ないので、原漢文の紹介が必要と思われる。

「靜寄軒集序」の存在に触れているのは、白木豊氏である。明治二七年（一八九四）生まれの白木氏は、恐らくは最後の著作であろう『尾藤二洲伝』（愛媛県川之江市発行、一九七九年、五九二―四頁）に於いて、「この序は六百字に余る長文で、難解な語句が多い。平易に略述する。」と、序文の現代語釈釈文を記している。原漢文の記載が無く、目次の扱いは附録となつて居る。以下に原漢文を記す。

靜寄軒集序

大陽之中於天也赫然至明萬物之所同觀夫豈有可疑乎哉然而雲霧之或蔽焉則黯然若長夜矣雖然此特地上數里之事耳人升扶桑踞崑崙而

觀焉則其赫然之明固自若也道之有顯晦也其亦猶此已異言邪說都沛充塞自非高明絕俗之資與篤志力學之至詎能瞭然而無疑哉嗚呼難矣若華夏則姑置焉吾邦自慶元以來諸儒輩出治經講道率為醇正雖間有異同猶夫微雲點綴不以足蔽翳乎大陽也及伊藤氏者出握其徧淺率易之見偃然以孔孟嫡派自命詆程朱為禪佛而其所談說乃不出明季陋儒之謬解焉物氏繼興又益之以功利之說誣古聖賢仁義道德之微言以為詭淫邪遁之資譁張為幻無所不至輕俊之徒喜新奇樂淺易而愛放縱者舉為其所驅率於是二氏之說盈天下而道者泯然若人矣譬之雲雨晦冥之中而疾雷破耳飛電爍目鸚鵡罔兩號呼而跳舞焉雖大陽之明未嘗少減人亦無由而觀之也當此之時非無一二儒者卓然不為其所惑而能見斯道之眞者也然不由師授必由家學獨吾二洲藤先生則不由師授不由家學而超然有詣屹然為當世之底柱斯其尤難而可尚者也歟先生家世農夫也其少時所師友莫非二氏之徒及其疑而他求也又浸淫乎陸王之學者有年矣後復覺其非及反而求之洛閩之書籍諸古昔驗諸事物體斯身心然後悟斯道之傳有在焉遂盡舍其舊弗復他顧是故其談道也平正精實而無過高之蔽其闢異學也嚴切明覈而無過激之失蓋班班乎具乎集中矣嘗曰有天地斯有天地之理有人物斯有人物之理萬物萬事無適而不然詩云有物有則一句盡之又曰理者氣之理道者器之道則者物之則中者事之中言道而遺器言中而遺事者是異端知氣而不知理知物而不知則是俗學嗚呼豈非所謂升扶桑踞崑崙而觀大陽之明者與大洲加藤侯管從先生受學焉先生既捐館舍侯則慨然命有司梓其遺集而行之於世先生嘗授翼以校讐之事因與池誠中共執其役及刻成諸友亦以

遺命俾翼序之翼自違講帷殆二十年學殖荒廢有辱師訓豈足以序斯集  
 顧遺命之重不可以辭遂敢僭踰抒其素衷若此翼嘗聞加藤侯好學有惠  
 政斯舉之有貺於後學也亦大矣哉雖然今世之雲霧尚多矣苟非能睹大  
 陽之明者奚以知吾言之非阿比哉

門人播磨越翼撰

次に書き下し文を記す。書き下し文とするに当たっては、現代仮名  
 遣いで表記し、漢字にはルビを振った。その理由は、未だに白文の訓  
 読に不安が有り、若しも読者が有るなら、便宜を図り教示を頂きたく  
 思うので。以下全ての書き下し文の個所に於いて、同指の思いで居る。  
 猶、序文中の「大陽」「蔽翳」「邪遁」は、「太陽」「翳蔽」「邪道」と  
 思われる。併し、管見では、静嘉堂文庫所蔵の写本『静斎軒文集補  
 寫』に在る「静斎軒集序」以外には物が無いので、比較して確認する  
 事は不能である。因つて其の儘とした。

大陽の天に中するや、赫然として至明なるは、萬物の同じく觀  
 る所、夫れ豈疑うべき有らんや。然るに雲霧の或は焉れを蔽  
 えば、則ち黯然として長夜の若し。然りと雖も此れ特だ地上  
 數里の事のみ。人の扶桑に升起、崑崙に踞して焉れを觀れば、  
 則ち其の赫然の明、固より自若なり。道の顯晦有るや、其れも  
 亦た猶お此くのごときのみ。異言邪說、滂沛として充塞すれば、  
 高明絶俗の資と篤志力學の至とに非ざるよりは、詎んぞ能く

瞭然として疑うこと無からんや。嗚呼、難きかな。華夏の若き  
 は、則ち姑く焉れを置く。吾が邦、慶元より以來諸儒輩出、  
 經を治め道を講ずること、率ね醇正と為す。間異同有り、雖  
 も、猶お夫れ微雲の點綴するがごとく、以て大陽を蔽翳するに足  
 らざるなり。伊藤氏なる者出づるに及び、其の褊淺率易のを見を握  
 り、僣然として孔孟の嫡派を以て自ら命け、程朱を詆りて禪佛  
 と為す。其の談說する所は、乃ち明の季の陋儒の謬解を出で  
 ず。物氏繼いで興り、又之れに益すに功利の説を以て、古聖賢仁  
 義道德の微言を誣いて、以て詖淫邪遁の資と為し、譎張して  
 幻と為すこと至らざる所無し。輕俊の徒は、新奇を喜び淺  
 易を樂しみ、放縱を愛する者は、擧げて其の驕率する所と為る。  
 是に於て二氏の説、天下に盈ち、道は浪然として亾きが若し。之  
 れを譬うれば、雲雨晦冥の中、疾雷耳を破り、飛電目を爍かし、  
 鸚鵡罔兩號呼して跳舞するや、大陽の明、未だ嘗て少しも減ぜ  
 ずと雖も、人亦た由つて之れを觀る無きなり。此の時に當つて、  
 一二の儒者、卓然として其の惑わす所と為らず、能く斯の道の  
 眞を見し者無きに非らずや。然れども師授に由らざれば必ず家  
 學に由る。獨り吾が二洲藤先生は、則ち師授に由らず家學に由  
 らず、超然として詣る有り、屹然として當世の底柱と為る。斯  
 れ其の尤も難くして尚ぶべき者なるか。先生は家世農夫なり。  
 其の少時、師友とする所、二氏の徒に非ざるは莫し。其の疑  
 うに及んで他に求むるや、又陸王の學に浸淫する者年有り。後復

た其の非なるを覺り、反みるに及んで之れを洛閩の書に求め、諸れを古昔に稽え、諸れを事物に驗し、斯れを身心に體し、然る後、斯の道の傳え、焉に在る有るを悟る。遂に盡く其の舊を捨て、復たとは他を顧みず。是の故に其の道を談ずるや、平正精實にして過高の蔽なし。其の異學を闢けるや、嚴切明瞭にして過激の失無し。蓋し班班乎として集中に具われり。嘗て曰く、天地有れば、斯に天地の理有り。人物有れば、斯に人物の理有り。萬物萬事、適くとして然らざるは無し。詩に物有れば則ありと云える一句、之れを盡せりと。又曰く、理は氣の理、道は器の道、則是物の則、中は事の中、道を言いて器を遺れ、中を言いて事を遺るる者は是れ異端。氣を知りて理を知らず、物を知りて則を知らざる者は是れ俗學と。嗚呼、豈所謂扶桑に升起崑崙に踞して太陽の明を觀る者に非らずや。大洲の加藤侯、嘗て先生に従つて學を受く。先生既に館舎を捐つ。侯則ち慨然として有司に命じ、其の遺集を梓して之れを世に行わしむ。先生嘗て翼に授くるに校讐の事を以てせらる。因つて池誠中と共に其の役を執る。刻成るに及んで、諸友亦た遺命を以て翼をして之れに序せしむ。翼、講帷を違りてより殆んど二十年、學殖荒廢し、師訓を辱しめる有り。豈以て斯の集に序するに足らんや。遺命の重きを顧えは、以て辭すべからず。遂に敢えて僭躐ながら其の素衷を抒ぶること此くの若し。翼嘗て聞く、加藤侯學を好み惠政有り。斯の學の後學に貶うる有るや、亦た大なるかな。然り

と雖も今世の雲霧尚お多し。苟に能く太陽の明を睹る者に非ずんば、奚ぞ以て吾が言の阿比に非ざるを知らんや。

門人、播磨の越翼 撰

亡師の遺稿集に序を寄せる弟子が、師の学徳を賛え、その思想の特質を顕述するのは、至極当然の事である。所謂論文らしく明解に文章・議論を展開していく能力を欠くので、論述にならず、気付いたことの雑記にならざるを得ない。

二洲の著作に寄せられている序文は、一体に短文であるが、頼春水(一七四六—一八一六 安芸藩儒官)の「正學指掌序」は例外の長文である。其の春水の序文を遙かに超す「靜寄軒集序」は、些か長文に過ぎ、何やら二洲に不似合いな氣もする。越翼が、師二洲の学徳を世に明らかにしようとして、烈しいリズムで語る所の、

此の時に當つて、一二の儒者、卓然として其の惑わす所と為らず。能く斯の道の眞を見し者無きに非らずや。然れども師授に由らざれば必ず家學に由る。獨り吾が二洲藤先生は、則ち師授に由らず家學に由らず、超然として詣る有り、屹然として當世の底柱と為る。斯れ其の尤も難くして尚ぶべき者なるか。

の個所は、二洲の学問の最大の特徴を描出している。一句で云えば「師授に由らず家學に由らず」である。併し、続いて「先生は世々農夫なり」と有るので、「家學に由らず」は扱置くことになり、「師授に由らず」こそが二洲の学問の特徴を尽言している。

若い頃師友としたのは、伊藤仁斎（一六二七—一七〇五）荻生徂徠（一六六六—一七二八）の徒でない者は無かった。古義学・徂徠学に疑問を抱いて、他に求めた時、陸象山（一三九一—一九二）王陽明（一四七二—一五二八）の学に溺れ、数年を経た。後に又其の非なるを覺つて、洛閩の書に至り、道の正しい伝統が程朱の学に在るのを悟つた。遂に悉く旧学を捨てて、二度と他を顧みなかった。——と、続述する部分も、師の授けに由らずして自得的に、朱子学の精微に深通したことを、再説して居るのである。

頼山陽（一七八〇—一八三三）は、「師友志補遺」の中で、二洲を「先生識悟超詣絶倫」（関儀一郎編『日本儒林叢書』第三卷史）と評し、伯父二洲の知的理解力がこの上なく拔群であつたと伝えている。因みに、山陽の生母梅颯（一七六〇—一八四四春水の配）は、二洲の後配梅月（一八三三）の姉である。山陽の評に乗つて、碎けた表現で二洲を語るならば、程朱の書だけを読んで、朱子学者と称して、古学に暗い者とは違う。そこが二洲の朱子学の特徴なのだ、と云うことになる。

改まつて筆者の感じたままの意を表示すると、越翼が描出しようとした二洲の姿は、師からの伝授に由る学の正統の系譜ではなく、古学に親しみ、理解したからこそ、其の非を悟り、試行錯誤に由り自得的に朱子学へ転じた系譜である、と云う事になる。越翼は、「反みるに及んで之れを洛閩の書に求め、諸れを古昔に稽え、諸れを事物に驗し、斯れを身心に體し、然る後、斯の道の傳、焉に在る有るを悟る。」と云う。併し、二洲が「古昔に稽え、事物に驗し、身心に體し」たのは、

何も程朱の学だけでなく、古学の遍歴に於いても然様であつたと理解する可きで有るまいか。詰まり、二洲の学問の方法と云うよりは、二洲の学問への態度は、これに親しみ、これを理解し、由つてこれの正非を悟ると云う、江戸時代中期に端をもつ古医方の「親試実験（次節で雑述）」に近いものを感じる。

併し、「静寄軒集序」は此の様に存在して居たのに、丸で無かつたかの様で有つたのは、如何してなのだろうか。「静寄軒集序」は、本當に世間に伝えられて居たのだろうか。若しも此の序文を抜いて、写本「静寄軒集」が流布して居たのなら、其れは如何してなのか。と、自問せざるを得ない。「刻成るに及んで、諸友亦た遺命を以て翼をして之れに序せしむ。」と有るが、『静寄軒集』は板刻されず、写本としてののみ伝えられた。板刻されなかつた事が、「静寄軒集序」の存在が弱々しい事由であろうか。若し然うで有るなら、「及刻成」の唯三字を削除修正すれば、それで良いではないか。

では、越翼に事由が有るのか。管見では越翼なる人物は未詳に近い。大塚先儒墓所（東京都文京区大塚）に在る二洲の古墳墓には、門人池野孝暢（未詳、高橋勇太）の撰に成る墓誌が刻まれているのに、如何してか二洲研究家の間では、「豊山・篤山・高洲を二洲門下の三傑」と呼んでゐる（森実善四郎『川之江郷土物語』五四二—五四三）。

長野豊山（一八九三—一八三七）は、昌平校で二洲の教えを受け、伊勢神戸藩・信州松代藩・武州川越藩の藩儒としての経歴が有り、版本

『松陰快談』の他数点の著作や『豊山文集』等が現存している。猶、二洲の『素餐録』に豊山の序文が有る。広岳禪院(東京都港區高輪)には豊山長野先生之墓の古墳墓が在り、林長孺撰の碑文が刻されている。長孺は、鶴梁(一八〇六—一八七八)と号し、高輪泉岳寺に在る赤穂義士の烈士喜剣碑の撰人である。

近藤篤山(一七六六—一八四六)は、大阪の塾と昌平校で二洲の教えを受け、後伊予小松藩の藩儒として三七歳より七七歳まで仕官、伊予聖人と呼ばれた。「近藤篤山事畧」(篤山の著、渡部盛義編)の他に、近藤久吉編『篤山遺稿』(私家版)・渡部盛義著『近藤篤山』(愛媛県教育会)が有り、篤山を伝える事物は盈満している。『素餐録』の天保九年(一八三八)版には、篤山の序文が記されている。猶、篤山の古墳墓(愛媛県周桑郡小松町)の碑文は、幕府儒官佐藤一齋(一七七一—一八五九)の撰である。

渡部盛義氏蔵の越翼の書に高洲と署しが有るので、高洲は越翼の号である。管見では、未だに越翼の古墳墓や著作・遺稿集を見たことが無く、藩儒の仕官等の経歴を伝えるものも無く、二傑の豊山・篤山に比べると、越翼なる人物は未詳に近い。次に、此れ迄に得た越翼の欠けらの一端を記す。

頼春水の「師友志」に、越智翼の名が次の様に出ている。

赤松惟義字子方。以春菴一行。播州人。少時出郷住河内。後徙大坂。以醫爲生。爲人朴實。常談性命。不作詞章。以道學自居。所交必厚。知無不言。見無不規。

自謂徑行直情。不能巧低昂。於交遊間。與二洲最善。常言吾晚志義理之學。而無所造詣。是爲終身之憾。幸有丈夫子。吾欲其爲儒。不欲其爲醫也。醫易富。儒易貧。而如吾父子之拙生計。醫儒奚異。與其餓於醫。寧餓於儒。後暴病沒。托孤於二洲。名翼。字文平。才學兼優。下帷張業。可謂善繼志者。文平稱本姓越智。(関儀一郎編『日本儒林叢書』第三卷史伝書簡部、二頁。鳳出版、一九七八年)

次いで、筆者の書き下し文を記す。  
赤松惟義字は子方。春菴を以て行わる。播州の人。少時郷を出でて河内に住す。後大坂に徙つて、醫を以て生と爲す。人と爲り朴實。常に性命を談ず。詞章を作らず、道學を以て自ら居る。交わる所必ず厚く、知りて言わざる無く、見て規せざる無し。自ら謂う徑行直情と。低昂を巧にすること能わず。交遊の間に於いて、二洲と最も善し。常に言う吾れ晩く義理の學を志し、而して造詣する所無し。是終身の憾と爲す。幸いに丈夫子有り。吾れ其の儒爲るを欲し、其の醫爲るを欲せざる。醫は富易く、儒は貧し易し。而して吾が父子の生計に拙なる如くは、醫儒奚ぞ異ならん。其の醫に於いて餓えるよりは、寧ろ儒に於いて餓う。後暴病にて没す。孤を二洲に托する。名は翼、字は文平、才學兼優る。帷を下して業を張る。善く志を繼ぐ者と謂うべし。文平本姓越智を稱す。

「二洲と最も善し」交遊關係に有った播州の儒医赤松惟義の子が、

越智翼である。惟義は、我が子を托するに二洲を於いて外に無いと、「才學兼ね優る」翼を大阪の二洲塾に入れて、親しく二洲の薰陶を受けしめたのであろう。越智の越は、越智を直して一字としたもので、翼は名であることが分かる。師の事を書く場合、名を記し、字や号を用いないのが礼儀であったので。

篤山の長子南海(二八〇七—一八六二 小松藩文化四—文久二年 儒官)と門下生の共同執筆に成る、篤山に就いて記述した「近藤篤山事畧」が有る。既に渡部氏が『近藤篤山』に於いて、「原文はすべて漢文であるが読解の便宜上仮名交り文に書き改め」て、新字体で全文を書き下している。其の中に次の二記事が有る。

ア年二十三大阪に遊学す。貧約堅苦、而して学に力む。時に米価騰貴し、常に芋粥・雪花菜を以て飢を忍び、日或は一食、越先生撰する所の坦齋君墓誌中に之を詳敘す。

イ友人越士亮と相信すること極めて厚し。士亮は家君より年少なること数歳なれども而も学夙に成る、家君之に兄事す。家君は性敦厚にして詳審、又甚しくは力を詞章に用ひず。士亮は性嚴毅にして豪邁、文才有り。然れども其趣同じくして常に相信す。嘗て濶を遣はして往いて業を受けしむ。明年士亮歿す。其之を痛惜し爾後忌日及び歳時毎に香を焚き東向して之を拝す。

これに由つて、小松の篤山旧居前に在る坦齋君の墓誌を見ると、越先生は播磨越翼である。従つて、越士亮も越翼である。渡部氏の近藤篤山先生年譜に由れば、濶(南海の諱)が越士亮に入門したのは、文

政八年(一八二五)である。「明年士亮歿す」と有ることから、越士亮が没したのは文政九年(一八二六)となる。即ち、越翼は、姓は越智で名は翼、高洲・士亮と号し、生は未詳も文政九年(一八二六)の没である。

三品容齋(一七六九—一八四七 篤山の弟、諱は明和六—弘化四年 崇西桑藩儒官)の撰に成る篤山の墓誌に、次の記事が有る。

天明八年(一七八八)戊申年、年廿三、先考に請ひ崇と共に大阪に遊学し業を二洲尾藤先生に受く。先考其薄俸を割きて之に資す。時に米価騰涌し筆瓢屢空し。しかれども先生澹然として書を讀み研求して息まず。師友皆其苦学を称す。寛政辛亥(三年)先師幕府の召に応じ昌平廟学の教官となる。故ありて従ふ能はずして大阪に留まる。同門越士亮は才群を抜く。相友善し討論講習して晨昏も倦かず。(原漢文、渡部「近藤篤山」、三九六頁)

篤山と士亮は、大阪二洲塾の同門にて、士亮は逸材、二洲が幕府儒官の召命を受け江戸に出た後、篤山・士亮がその門下生を教育、帰郷の後篤山は、長子南海を入門托するほど、士亮を信頼し畏敬の友とし、二人の交遊は生涯親密であった、と記述は伝える。小松藩儒官にして伊予聖人と呼ばれたのが、篤山である。ならば越翼なる人物は、未詳に近いけれども、徒ならぬ儒者である気配がするではないか。「静寄軒集序」の弱弱しい存在の事由が、越翼なる人物に有るとは迫も思えない。

筆者は、越翼の撰に成る序文が摸写され流布した気配が弱弱しいの

は、「不由師授不由家學」と云う、二洲の学問の最大の特徴を記した肝心の部分に、その事由が潜在して居るのではないかと思う。稚拙で乱雑な推理を後述に於いて少し試みるが、二洲の時代に於いては其の様な文言は、徂徠学を激しく攻撃した正学派朱子学者二洲(寛政の三博士の一)にとつて、両刃の剣に成る危さを持つて居たと考えられる。

## 二、「與藤村合田二老人書」

本節では、二洲の「與藤村合田二老人書」『靜寄軒文集』卷一、(靜嘉堂文庫藏)を基

にして、越翼の撰に成る「靜寄軒集序」の「二洲藤先生則不由師授不由家學」に潜在するやも知れぬ、密やかな危さに就いて、相も変わらぬ稚拙な推理を雜記する。若しも読者が有るなら、便宜を図りたく思うので、原漢文並びに筆者の書き下し文を記す。

與藤村合田二老人書 藤村名直香字九臯合田名強字求吾皆讚岐和田濱人脩並河氏之學

客歲僕歸省將就訪二公先丈匆匆不果又不脩隻字以奉候即願言之懷何以取信恭惟雅候佳勝德業日高令望日熾可欽可仰僕鳩居無聊拮据之餘且不自量以教授爲業既不能砥行立名復不能醫卜自晦然面目妄抗願爲人師雖出于不得已亦顧增愧赧耳若其於所見則頗似有所得者二公固知我愛我不敢不以告蓋僕成童之時既能讀書二公之所素知也爾後涵濡典籍間好爲物氏復古之學當時以爲聖人之道求于此而備焉

作詩作文唯以李攀龍王世貞之不可及爲憂歲庚寅來于大坂養病醫古林氏偶讀護園隨筆於是始自疑於物氏之說焉乃著文一篇以質之片北海北海乃教以熟讀孟子因如其教者數月稍稍與物氏之古不古然後讀中庸又溯讀易於是疑者日解喟然歎於北海之爲先覺而猶未知所滴從也支離曠日汎濫過月而其於程朱之言半信半疑既而讀四書集注易傳及太極圖說二程全書等書信者益定疑者益解乃始識程朱之言深得聖人意而萬古不可易者也於是顧視曠昔所爲則愧悔交生不啻泚額今歲初秋病暑在蓐偶一友生過訪因舉前事以語之友生歸齋贈其所藏駿臺雜話者而曰是先得子心之同然者僕既得卒業不知手舞足蹈其中有曰世無善讀濂洛書者信哉斯言方今學者紛紛然立異說以爲自成一家者是其故未嘗不職由焉如前所與之書雖以僕之不敏亦豈不嘗讀邪唯求之字句上而不知求之義理也則程子所謂不會讀云者耳嗚呼江戶輕佻之俗士民皆汲汲乎聲譽利達不圖此中有此正學底翁也於是乎乃益用力於此日勤一日雖未能脫然超詣而於道之一端則不必爲無得子曰朝聞道夕死可矣僕今而後得微窺其旨矣二公固知我愛我是不可不以告敢陳區區以請正不知二公以爲何如僕曠昔之見固二公之所不悅而今日之見想亦未以見是也蓋僕所以深服程朱者在理氣二字而二公所以不見是者亦在此已雖然程朱之所以爲程朱則唯此二字伏願二公其裁之書辭狂悖甚懼唐突不敢盡所欲言大介君源右君想皆無恙幸爲一致意

明和壬辰八月念八日

此書議論未瑩余時年廿五始向正學故姑存之以讓其始

出典の「靜寄軒文集」卷一（靜嘉堂文庫藏）は、表紙の題簽が「靜寄軒文集」で、柱刻は拙修齋叢書「靜寄軒集」となっている。他に、題簽と柱刻が「靜寄軒文集」となっている拙修齋叢書木活字本も在る。写本「靜寄軒集」卷五を加えて、以上の三書を比較照合して見た結果、先に引用した原漢文に於ける、「自」「與」「滴」「與」「議」の個所は、順に「有」「覺」「適」「擧」「記」と直すのが適切である。因つて、書き下し文に於いて然様に訂正した。

藤村・合田二老人に與うる書  
藤村、名は直香、字は九草。合田、名は強、字は求吾。皆、讃岐和田濱の學を脩む。

客歳、僕歸省し、將に就ぐ二公先丈を訪れんとせしも、匆勿にして果さず。又隻字を脩めて以て奉候せず。即ち願言の懷、何をか以て信を取らん。恭しく惟みるに雅候佳勝にして、徳業日に高く、令望日に熾んなる、欽うべく仰ぐべし。僕鳩居して聊み無く、拮据の餘に、且く自ら量らず、教授を以て業と爲す。既に行いを低きて名を立つる能わず、復た醫卜をもつて自ら晦ます能わず、顧然たる面目をもつて、妄りに抗顔人の師となる。已むを得ざるに、出づと雖も、亦た顧みて愧赧を増すのみ。其の所見に於ける若きは、則ち頗る得る所有る者に似たり。二公固より我を知り我を愛す。敢て以て告げざらんや。蓋し僕成童の時、既に能く書を讀むは、二公の素より知る所なり。

爾の後典籍の間に涵濡し、好んで物氏復古の學を爲む。當時以爲えらく聖人の道此に求めて備わると。作詩作文は、唯だ李攀龍、王世貞の及ぶべからざるを以て憂となす。歳の庚寅、大坂に來り、病を醫古林氏に養ひ、偶護園隨筆を讀む。是に於いて始めて物氏の説に疑い有り。乃ち文一篇を著わし、以て之れを片北海に質す。北海乃ち教うるに、孟子を熟讀するを以てす。因つて其の教の如くする者數月、稍稍物氏の古の古ならざるを覺る。然る後中庸を讀み、又溯つて易を讀む。是に於いて疑うこと日に解け、喟然として北海の先覺爲るを歎ず。而れども猶お未だ適從する所を知らざりしなり。支離して日を曠しくし、汎濫して月を過せり。而して其の程朱の言に於いては、半は信じ半は疑う。既にして四書集注、易傳及び太極圖說、二程全書等の書を讀み、信する者益定まり、疑う者益解け、乃ち始めて程朱の言の深く聖人の意を得て、萬古易うべからざる者を識るなり。是に於いて曠昔爲めし所を顧視れば、則ち愧悔交生じ、香に頼に泚するのみならず。今歳の初秋、暑を病みて薙に在り。偶一友生過訪す。因つて前の事を擧げて以て之れを語る。友生歸りて其の藏する所の駿臺雜誌なる者を齎し贈り、而して曰く、是れ先ず子の心の同然を得たる者なりと。僕既に卒業することを得て、手の舞い足の踏むところを知らず。其の中に曰える有り、世に善く濼浴の書を讀む者無しと。信なる哉斯の言。方今の學者、紛紛然として異

説を立て、自ら一家を成すと以爲える者は、是れ其の故未だ嘗て職ら焉れに由らず。前に擧ぐる所の書の如きは、僕の不敏を以てすと雖も、亦た豈に嘗て讀まざらんや。唯だ是れを字句の上のみ求め、之れを義理に求むるを知らざりしなり。則ち程子の所謂曾て讀まずと云う者のみ。嗚呼、江戸輕佻の俗、士民皆な聲譽利達に汲汲たるに、圖らざりき、此の中に此の正學底の翁有らんや。是こに於いて、乃ち益力を此れに用い、一日に勤む。未だ脱然として超詣する能わずと雖も、道的一端に於いては、則ち必ずしも得る無しと爲す。子曰く、朝に道を聞かば夕に死すとも可なりと。僕今にして後微かに其の旨を窺うを得たり。二公固より我を知り我を愛す。是れを以て告げざるべからず。敢え區區を陳べて、以て正を請う。知らず二公の以て何如と爲すや。僕の曠昔の見は、固より二公の悦ばざる所、而して今日の見も、想うに亦た未だ以て是とせられざるなり。蓋し僕の深く程朱に服する所以は、理氣の二字に在り。而して二公の是とせられざる所以も亦た此に在るのみ。然りと雖も、程朱の程朱爲る所以は、則ち唯だ此の二字のみ。伏して願わくは二公其れ之れを裁せよ。書辭狂悖にして、甚だ唐突なるを懼れ、敢て言わんと欲する所を盡さず。大介君、源右君、想うに皆恙無からん。幸いに爲に一たび意を致したまえ。

明和壬辰 八月念八日  
此の書 議論未だ瑩かならず。余、時に年廿五、始めて正

學に向う。故に姑く之れを存して、以て其の始を記す。

この書簡は、二洲自身が朱子学に転向した始めを記述したものであるので、二洲研究にとつて重要な文献である。幕府の教学政策が変質した天明・寛政期（一七八一—一八〇二）は、儒学・国学・蘭学、その他の多彩な学問思想が、熾盛であった時期である。儒学に於いては、隆盛を誇った徂徠学に替わつて折衷学が顕学と成り、其れ等を排撃する正学派朱子学が勢いを得てくる。そうした朱子学復活の動向が、この書簡に於いても明瞭に窺える。

二洲は郷里に在った頃、徂徠学を学び、李攀龍（一五一四—一五七〇）（明代の古文辞派）、王世貞（一五二六—一五九〇）（明代の古文辞派）の古文辞を範とした。庚寅の年（明和七、一七七〇）、二四歳の時大阪に上つて、片山北海（一七二三—一七九〇）（折衷学、混）の門に入った。『護園隨筆』を読み、徂徠の学説に疑いを抱き、北海の教示に従つて『孟子』を熟読、後徂徠の非を悟つた。併し、従う可き学を知ることが出来ず、取り留めがない状態で書物を広く読んで月を過ごした。越翼の「静寄軒集序」に「又陸王の學に浸淫する者年有り」と記されているので、この間に陸象山・王陽明の説に溺れていたであろう。然う斯うするうちに、『二程全書』等の洛閩の書を読み、程朱（程顥、程頤、朱熹）の説を正学であると確信するに至つた。『駿臺雜話』を読み、世の異学の起因は全て、程朱の書を熟読しない事に由来すると思つた。以上、「與藤村合田二老人書」から、二洲の徂徠学に始まり朱子学に転向していった過程を略記して

みた。

「與藤村合田二老人書」は、明和壬辰八月念八日即ち改元により安永元年（一七七二）八月一八日の記となっている。二洲は、延享四年（一七四七）十月八日生であるので、確かに二五歳である。庚寅の年即ち明和七年（一七七〇）に上阪と自記しているが、二洲二四歳の時となる。僅か二年ぐらいで、徂徠の書、仁齋の古学、諸々の折衷学、陸王の書、それに程朱学の書を読み、理解し其の正非を判断したことになる。幾ら山陽が伝える知的理解力拔群の二洲でも、期間が短か過ぎる。この書簡の付記に、「此書議論未瑩余時年廿五始向正學故姑存之記其始」と状態に有るのは、何故で有るのか。藤村・合田の二老人も、短期間に過ぎると思うのではなからうか。「故に姑く之れを存して、以て其の始を記す。」には、この書簡が藤村・合田の二老人に送付されたか否かに、後考を残していると思える。其の事は投置き、この書簡は、二洲の朱子学への転向の始めが、師の授けに由らず自覚的と云うよりは自得的<sup>自力体得</sup>で有る事を伝える。

二洲が、郷里の旧師<sup>う</sup>田川楊軒<sup>だがわ</sup>（一七三五—一七九三<sup>儒医</sup>）に宛てた書簡（<sup>年末詳</sup>九月一八日）の中に、「中井善太、徳次とて二人有<sup>レ</sup>之候へ共、家世の朱学諸家に味く候故、固より相謀り為すに足らず候。」（<sup>森実善</sup>尾藤二洲略伝、「川之江文」）とある。二洲と「不由家學」に就いて伝える時報<sup>マ</sup>一五一号、一九六三）とある。二洲と「不由家學」に就いて伝える時報、小さいが有り難い資料である。二洲在阪時代の大手の漢学塾は、片山北海の塾と懷徳堂であった。懷徳堂は、中井斂庵<sup>なかいしやうゑん</sup>（一六九三—一七五八<sup>朱子</sup>）が享保十一年（一七二六）、幕府の許可を得

て、大阪船場尼ヶ崎町に設けたのに始まる。斂庵の子善太即ち竹山<sup>ぜんた</sup>（一七三〇—一八〇四<sup>朱子</sup>）徳次即ち履軒<sup>りっけん</sup>（一七三二—一八一七<sup>朱子</sup>）の寛政時代は、懷徳堂の最盛時で、関西の学問思想の世界を牛耳っていた。二洲にとつて、その中井兄弟の家学に由る朱子学は、諸学に味い、ゆゑに物足りなかつたのである。

亦た、同書簡に「当時浪華に在りて、同志の人は頼千秋兄弟二人のみにて、其地は北海の家説<sup>か</sup>を守株、或は伯起が指挿<sup>さ</sup>に従う者にて、皆所謂人によりて功成す者数うるに足らず候。」とも有る。「地」「挿」は「他」「揮」の誤りであろう。折衷学の北海の塾は、詩の方の混沌社が大人気で、柴野栗山<sup>しばのりつざん</sup>（元文二—一八〇七<sup>寛政の三</sup>）木村兼葭堂<sup>きむらのかんかどう</sup>（元文二—一八〇二<sup>本草</sup>）頼春水等、錚錚たる連中が加わっていた。併し、二洲にとつては、師授に由る折衷学を守株する者も、数うるに足らず即ち問題にならなかつたので有る。因みに、頼千秋兄弟とは、春水・春風<sup>しゅんぷう</sup>（宝暦三—一八二五<sup>儒医</sup>）の兄弟である。春水の弟春風は、「與藤村合田二老人書」に出てくる所の古林見宜<sup>ふるはやしけん</sup>（一五七九—一六五七<sup>名は正温</sup>）の塾で医学修業をしていて、二洲が見宜塾の儒学の講師で、播磨の人<sup>は</sup>の塾で医学修業をしていて、二洲が見宜塾の儒学の講師で、春風が代教であつたと云われる。<sup>①</sup>明和・安永期の大阪に於いて、頼兄弟・尾藤二洲それに古賀精里<sup>こがせいり</sup>（一七五〇—一八一七<sup>寛政の三</sup>）等が、相共に朱子学の研鑽を積み深交を重ねた。其の様な、同志的な事情と活動の過程から、朱子学復活即ち正学派朱子学が形成されていった事は、既に定説と成っている。<sup>②</sup>二洲の朱子学への転向も、大阪でのこの動向に由る事は明白である。従つて、「不由師授不由家學」という事も、

自得的で有るも、同志的でも有ったと考えるのが適切であろう。

『靜寄軒集』卷五に「與藤村合田二老人書」を含む十五篇の書簡の部が有り、末尾に次の様な越翼に由る識語が記されている。「以上十五首は、皆な初年の筆に繋る。文辭未だ精しからず、議論未だ瑩かならず。或いは晩年と異なる者、先生嘗て自らこれを記せり。然れどもこれを刪れば、以て先生の學、師授に由らずして、超然と造實する有るを見る莫し。今敢えて刪らず。越の翼、敬しんで識す。」(原漢文)。これ等十五篇の書簡は、師二洲の學問が、師授に由らずして、高く越えて出て学の深奥に到達した事を証明している。だからして、文章や論旨が未熟だからと云つて刪る訳には行かない、と越翼は態態に付記している(此の段落は、白木氏の教示に負う)。

この識語も有ることに因つて、二洲研究の碩學と称される白木氏は、二洲の朱子學への転向の過程を、自得的である事を強調する余り、同志的動向の側面に対して少々非なる嫌いが感取される。即ち白木氏は、多少長くなるが、大略次の様に主張している。

藤村・合田の二老人に宛てた書簡は、二洲の朱子學への転向は、程朱の書を自ら読み、その正學たるを自ら信ずるに至つた経緯を知るに足りるもので、山陽が言うが如く、春水に勧められて始めて洛閩の書を読んだのでない事を証する貴重な文献である。程朱の言が深く聖人の意を得ていて、万古易うべからざるものであることを識り、これを信ずるに至つたという二洲の話の聞いて「先づ子の心の同然を得たる者」として『駿臺雜話』を持つて来た「一友生」なるものは、或は当

時大阪に遊學中で、片山北海盟主の混沌社の社友であつた春水かも知れない。然しそれはあくまでも『駿臺雜話』であつて、洛閩の書、程朱の書ではない、と(前掲白木「尾藤二洲伝」、七八頁)。

碩學白木氏の此の見解に、僭越ながら、筆者は同意致し兼ねる。二洲より一年早く上阪し、古林見宜の塾で医学修業をしていた頼春風が、二洲の代教となつた事は前述した。其の事を明らかにした頼祺一氏の資料紹介の中に、二洲の春風に宛てた次の書簡が有る。<sup>(3)</sup>

昨夜之臨、足大慰病懷謝々、今朝依旧藤上忽受見借二程全書 信手翻之、至乎明道先生定性說、沈潜反得不知手舞足蹈也、足下試來叩、我非復昨夜尾藤生矣、近日識与見日進一步、至今朝之所進則不啻數步、吁意愚不早曉有宇宙益之書如此者、拘々曠數歲於末技、今而惜之將如之何、足下好才子素知閩洛之為正道、伏願夙用力於實地、它日不与我同悔哉、謹忠告、二十七日 松三郎様 良佐

松三郎は春風の幼名で、良佐は二洲の通称である。「昨夜の臨、大いに病懷を慰むるに足り、謝々。今朝日に依り、藤上に忽ち見借の二程全書を受け、手に信せて之れを翻す。」と、二洲自身が云つている。二洲は、春風或いは春風に近い人物より、『二程全書』と云う洛閩の書、程朱の書を見借して居るのである。繰り返すが、春風は二洲より一年早く明和六年(一七六九)に上阪し、安永二年(一七七三)に帰郷し開業している。そして、二洲は明和七年(一七七七)に上阪、「與藤村合田二老人書」を明和壬辰即ち安永元年(一七

七二)に記している。然も、春風は二洲の代教で有った事から、二洲は病を養い勝ちで有ったと考えられる。其れ等の事から推察すれば、「二友生」は春風或いは春風に近い人物で、彼は、『駿臺雜話』を二洲に見貸させる前に、既に洛蘭の書『二程全書』を渡していた事になる。因つて、白木氏の見解は如何がなもので有ろうかと思う。

二老人に宛てた書簡の研究に於いて、従来より何かが見落とされてゐる気がする。即ち、二洲の朱子学に転向した始めを記述した面のみが論ぜられ、肝心の二老人藤村九臯・合田求吾に就いて論ぜられた事がない。全く不思議と云わざるを得ない。その事由の大因は、二老人なる人物が余りにも未詳に過ぎたからであろう。

二洲は、如何してなのか、この書簡の初めに九臯・求吾が「竝河氏の學を脩めた」と記している。これでは、伊藤仁齋の門人であつた京都の大儒並河天民なみかわてんみんに就いて、二人が学んだと解される心配が有る。日本思想史の碩学頼惟勤氏に、「二公とは……藤村九臯・合田求吾を指し、二人とも並河天民なみかわてんみんに学んだ。」と云う微妙なる記述が有る。天民は延宝六年(一六七八)に生まれ、享保三年(一七一八)に没した。藤村九臯は未詳であるが、合田求吾は享保八年(一七二三)に生まれ、安永二年(一七七三)に没している(次節で後述)。即ち、求吾が生まれる五年前に天民は没している。然様で有るなら、少なくとも求吾は、天民の門人に就いて学んだと解する事が出来る。医方を嗜み本草学を究めた天民の門からは、古医方の儒医が輩出したことは、良く知られてゐる。その古医方の立場は、何よりも「親試実験」と云う経験

主義を重んじた新漢方医学で、徂徠学の影響を強く受けていた。

少年の時より求吾に親しみ、安永四年(一七八二)の帰省の折に態態合田宅に弔意を表しに寄つた程の、然も博覧強記で名高い二洲が、如何して求吾を並河氏の学を修めたなどと、曖昧な記述を残したのであろうか。筆者は、越翼の撰に成る「静寄軒集序」の「二洲藤先生則不由師授不由家學」には、密やかな危さ、即ち徂徠学の排撃に徹した寛政の三博士・朱子学者尾藤二洲にとつての微妙なる危さが、潜在すると直覚するので有る。以下の雜記を次節に譲りたい。

### 三、温恭合田先生之墓

本節では、先ず合田求吾の古墳墓、温恭合田先生之墓の碑銘と、その書き下し文を提示する。次いで、それを基にして、越翼の撰に成る「静寄軒集序」の「二洲藤先生則不由師授不由家學」に潜在するやも知れぬ、謎めいた危さに就いて、多少気合いを籠めて稚拙な推理を雑述する。若しも読者が有るなら、筆者の作記に就いて、其れ之の裁を頂けると、誠に有り難い。

又もや私情を吐記し論叢を汚す事になるが、列島改造なるものが横行して以来、地域の活性化の合唱の下に、寒村にも大道路等が走り、邑の風景が一変した。後人の為に、銘を阡せきに勒ちやくし永くこれを孚まことと為す古墳墓・石碑は、まるで粗大塵を片付けるかの様に、滅せられて行つた。平成二年(一九九〇)の夏、香川県三豊郡豊浜町の墓地にて、

温恭合田先生之墓に遭偶、墓碑銘を判読する中に、これが合田求吾の墓である事が解り、筆者は歎喜し偶然に感謝した。二百年以上前の、郷處僻遠の地に在した、無名の人物の墓が、真逆現存していたとは。

温恭合田先生之墓

君諱強字千之稱求吾姓合田氏號巨鼈讀岐國豊田郡和田濱人祖考宗智諱温良字快菴業醫娶岡田氏生一女鞠合田吉白之五男吉盤配之即君之考也君自幼從于同郡合田又玄高橋柳哲二子而學弱冠行業及壯知術之難施學之多疑幡然以為術未足施識未得開不可不就良師而學遂來于京師遊乎一閑齋松原先生之門學孔孟之道肆長沙之術粗通其學又□吾先子為人□□□□□□□□□□無劇疾。屢來京就正君嘗謂紅毛亦有一術□聞之可以有利益治術造于長崎就吉雄幸及懇求幸及善志之篤譯而傳之其餘□時名者無不就而聞於是名績日著至于隣國招延云君天資温和□不言人之惡能揚人之善事於父母色養不闕賑寒族卹無告郷處僻遠人不知學君倡道嚮學嘗謂生徒曰不明于學醫亦不成所著有野學紅毛醫述辨醫草文集等皆藏于家娶佛證寺泉溪之女先沒生一男一女男德基女天繼配百々氏生三男一女長一二次三千藏天次民治□享保癸卯十一月十四日生安永癸巳四月十二日疾沒享年五十有一葬于邑西先塋之側門人私名曰温恭先生德基從予學頃丐銘其墓余不得辭因其事狀叙世行之大略銘曰

夙從師友 芳聲日臻 家道殷昌  
宗族相親 讚州之域 表斯玄珉

京師 渡邊弘謹識  
大阪 加藤景範書  
男 德基建

諸岐國豊田郡和田濱即ち現在の香川県三豊郡豊浜の町からは、四国八十八ヶ所札所巡りで知られる第六十六番雲辺寺の雲辺寺山が、はっきりと望める。遍路転がしの異名を持つ雲辺寺山は、地元では昔から巨鼈山とも呼ばれてきた。巨鼈とは、想像上の大海亀で、中国古代の伝説の仙山を云う。所で鼈は、只のすっぽん・泥亀のことである。求吾は、此の豊浜の地に生まれ育ったので有るから、当然に雲辺寺山即ち巨鼈山は馴染みの風物で有るはずだ。因つて、碑銘の「巨鼈」は誤記にて、「巨鼈」が正しいと思う。書き下し文は巨鼈に直す。

墓碑銘の判読は容易でなく、年を費やした。欠損文字は、全欠損、部分欠損を合わせて二三字有る。全欠損にて判読不能が八字、重度の部分欠損にて判読不能が二字、前後より推察し判読したのが三字である。坂出市の鎌田共済会郷土博物館（鎌田醤油株式会社設）に、「昭和四年（一九二九）十二月十二日柩」と記された温恭合田先生之墓の拓本が保存されている。その拓本から判読したのが残りの一〇字で、「粗通」等の「〇」印を付した文字である。所が、豊浜町文化財保護協会が平成六年（一九九四）に発行した「ふるさと豊浜」第二集には、「二百有余年の風雪に耐えて、苔むし黒ずんではいるが、君諱強字千之称求吾合田氏号巨鼈讀岐國豊田郡和田濱……に始まる二百六十四字

の銘文は今も容易に判読することができる。」と記されている。昭和四年の拓本に於いてさえ、一三字が欠損にて判読不能と思われるのだが……。次に、筆者の書き下し文を記す。

温恭合田先生之墓

君諱は強、字は千之、稱は求吾、姓合田氏にて、巨鼈と號す。讃岐國豊田郡和田濱の人。祖考宗智、諱は温良、字は快菴にて、醫を業とす。岡田氏を娶り、一女鞠生まる。合田吉白五男吉盤を之れに配す。即ち君の考なり。君、幼きより同郡の合田又玄・高橋柳哲の二子に従いて學び、弱冠にして業を行なう。壯に及んで、術の施し難く學の疑い多きを知り、幡然として以為えらく、術未だ施すこと足らず識未だ開くことを得ず。良師に就いて學ばざるべからずと。遂に京師に來たりて、一閑齋松原先生の門に遊び、孔孟の道を學び長沙の術を肄い、其の學に粗通す。(判読不能)黨に劇疾無けれども、屢京に來たりて就正す。君嘗て謂う。紅毛も亦た一じ術有り。之れを凝聞すれば、治術に益有るべしと。長崎に造り、吉雄幸及に就いて懇求す。幸及善志之れ篤く、譯して之れを傳う。其の餘脩時に名き者にて就かざるは無く、是に於いて名績日に著しく聞こえ、招延隣國に至ると云う。君、天資温和にして、口に人の惡を言わず、能く人の善を揚げる。父母に事えて色養闕らず、寒族を賑わしめ、無告を卹れむ。郷處僻遠の人學を知らざるによ

りて、君は倡道して學に嚮わしむ。嘗て生徒に謂う。曰く、學に明らかならざれば醫も亦た成らずと。著わす所、野學、紅毛醫述、辨醫草、文集等にして、皆家に藏める。佛證寺泉溪の女を娶るが、先に没す。一男一女を生む。男は德基、女は天す。繼配は百も氏、三男一女を生む。長は二二、次三千藏は天し、次は民治と呌す。享保癸卯十一月十四日に生れ、安永癸巳四月十二日に疾没す。享年五十有一。邑の西先坐の側に葬る。門人私易名す。曰く、温恭先生と。德基、予に従いて學びし頃、其の墓に銘すことを丐う。余は辭むを得ず其の事狀に因りて、世行の大略を叙べたり。銘に曰く、

夙に師友に従い 芳馨日に臻る 家道は殷昌し  
宗族相い親しむ 讚州の域 斯に玄珉表わる

京師 渡邊弘、謹んで識す  
大阪 加藤景範 書  
男 德基、建

温恭先生とは、求吾の温厚な人柄を慕って、門人たちが呼んだ贈名である。墓碑銘に由り、求吾の略伝を記す。

求吾は、享保八年(一七二三) 讃岐國豊田郡和田濱の医家に生まれ た。名は強、字は千之、通称求吾で合田氏、巨鼈と号した(二洲は、藤村・合田二老人宛の書簡で求吾を字と誤記)。同郷の合田・高橋の二氏に就いて医術を学び、家業の医を継いだ。向学心に燃え京都に遊

学、松原一閑齋に就いて医術と学問を修業した。後、長崎に遊学、吉雄幸及即ち阿蘭陀通詞吉雄耕牛(享保九—寛政二)に就く。耕牛に紅毛医術書の訳読を願ひ、それを記録して『紅毛醫述』とした(豊浜町文化会館に複製が展示)。温厚な性格にて人の悪口を云わず、「学に明らか成らざれば、医もまた成らず」と、医術を志す者は学問も怠らぬ様にと、門人の教育をした。安永二年(一七七三)五二歳にて没したが、求吾の温厚な人柄を慕つて、門人達は温恭先生と贈名した。

求吾は、当時の我が国の郷處僻遠の地に於いては珍しい、正式の蘭方医(内科)と思われる。昭和十二年(一九三七)一月二八日発行の『中外醫事新報』(第二三九号)に、富士川游氏(一八六五—一九四〇 日本医)の「温恭合田求吾先生」と云う一文が載っている。管見では、この一文は合田求吾研究の嚆矢にて、求吾に就いての諸記事は、全てこの一文を基にしていると云つても、過言ではない。富士川氏は、求吾の弟の後裔に当たる人物より、求吾の遺稿集の提供を受け、これを草したと記して居る。この一文と墓碑銘より、求吾の最大の恩師は、松原一閑齋である事が明白である。

求吾は京師京都にて、松原一閑齋(一六八九—一七六五)の門に入り、儒学と長沙湖南の術を学んだ。一閑齋は長門国(山口県)の人で名は維岳(これか)、通称は才二郎、並河天民(一六七八—一七二八)の門人にて、名護屋玄医(一六二八—一六九六)後藤良山(一六五九—一七三三)山脇東洋(一七〇五—一七六二)実験医学(万治二—享保二)と並んで古医方の四家と称された儒医である。天民は京都の人で、伊藤仁齋の門に入り、仁齋没後、子の東涯(一六七〇—一七三六)と門弟を

二分したほどの大儒である。天民は、儒学の他に兵書を好み、医方を嗜み本草学に行つた異色の実学主義の色彩を持つ人物である。所で古医方とは、複雑な宋学的自然哲学の影響を受けた理論を重視する後世(こうせい)方に抗して、江戸時代中期に起こつた医学・本草学の立場を云う。自らの薬の処方や治療を通じての経験を重視し、その典型である吉益東洞(一七〇二—一七七三)は親試・実験を標榜した。

古医方家一閑齋の塾生に対する教育の姿勢は、一体何の様で有つたのか。塾生がその著書を請うた折、一閑齋がそれに対して、「吾毎に世人が一知半解にして輒ち撰述を事とするに苦しむ、これが徒弟たるもの金科玉條としてこれを奉じて復たその右に出づることを念わず、學術が日に下るのは全く是に由る、我れ汝が常に務めて其志を高くせむことを欲す、吾輩庸医(わがはのちゆうい)となりて止まること勿れ」と、云つたと伝えられている。著述は人を誤ると云つてなさなかつたと云う(呉秀三「一閑齋先生及其子孫二就キテ」)。又、求吾の自記によると、一閑齋は求吾に、「道は近きにあり、高遠に求むべからず、……道は唯日日しなれたることなり」と戒め、実際に験知し、実践することの肝要を繰り返し教えた(この段落は、富士川氏を参照)。

此の様に、求吾は一閑齋から、師授に由る怠学の戒めと、自力に由る験知実践の学を教授され、医家としての志を高めるよう、薰陶を受けたのである。碎けた云い方をするなら、古医方家一閑齋は、医術は、師や誰かから伝授され得るものではなく、自分で経験を積み、怠る事なく自らの力で工夫し、自身で体得するしかない事を、求吾に教育し

たのである。「不由師授」<sup>師授に由らず</sup>として自らの力で体得すると云う、この自力体得主義即ち自得的は、啻に医術のみに限られる理由はない。古医方の儒医に於いては、自得主義即ち親試実験主義は、その学問に就いても然様で有るとした、と考える可きである。躊躇う事なく、筆者の結論を云う。合田求吾は、尾藤二洲が「與藤村合田二老人書」に於いて記した様に、古学の大儒並河天民の学を修めたのではなく、古医方家松原一閑齋から、親試実験主義の医術と学問の教育を学んだのである。

二洲は、二老人宛の書簡に於いて、少年の時から求吾に親炙した事を記して居る。亦た頼山陽は、舌を巻く程、伯父二洲の知的理解力が抜群で有ったと記して居る。其の様な二洲が、二五歳の若さの折、求吾（天民没後の生まれ）が古医方家松原一閑齋の弟子で有る事を、知らぬ訳がない。二洲は、求吾が一閑齋の学を修めた事実を、隠そうと意図して居るとしか思えない。

稚拙な囁言が過ぎる雑述を、何とか整理して見る。二洲の高弟を代表する越翼、その彼の撰に成る「静斎軒集序」に於いて、二洲の学問の最大の特徴は、「不由師授不由家學」と顕記されて居る。更に其の事を、越翼は表現を変えて、「古昔に稽え、事物に驗し、身心に體し」と、其の自得主義を再説す。此の自得的で有る事は、合田求吾が就いて学んだ、古医方家松原一閑齋の親試実験主義と、何等異なる事はない。所が、其の古医方の親試実験は、二洲が最も激しく攻撃し続けた所の徂徠学の影響の下に成立したので有る。「不由師授不由家學」に密かに潜在する、此の微妙なる両刃の剣の危さ（其れは二洲の学問に

とって不都合で有る）が、「静斎軒集序」の流布に懸念を惹起させたものと、筆者は考えるので有る。若しも仮りに、越翼に於いて、二洲の自力体得と古医方の親試実験とが、微妙に混在して居たとするなら、其れは如何してなのか。其の事由は、育ての父が朱子学者二洲で有つても、実の父が播州の儒医赤松子方で有る事に由るかも知れない。未詳の子方で有るが、彼の存した時代の関西は、確かに古医方の熾盛なる時で有った。

二洲の高弟と呼ばれる人物は、近藤篤山、長野豊山、池野孝暢にしても全て、師二洲の著作の何れかに序を寄せ、版本として伝えられて居る。亦た、彼等の古墳墓や墓誌、其れに著作さえも伝えられて居る。一人越翼のみが、小さな欠けらを遺して居る丈で有る事を、誠に哀れと思わざるを得ない。硬漢頼春水が、越翼の父赤松子方を伝えた言、「醫は富易く、儒は貧し易し。而して吾が父子の生計に拙なる如くは、醫儒奚ぞ異ならん。其の醫に於いて餓えるよりは、寧しる儒に於いて餓う。」を想起する。幸田成友著「大鹽平八郎」（東亜堂書房、一九一〇年）に、大塩中齋（平八郎）の当初の師は越智高洲（東）であると有る。確証の得られない記述で有るのは惜しいが、事實は兎も角、人々の越翼に対する真実の願いは、必ずしも文字の記述に於いて伝えられるものではない。真実は、口遊（うわま）に因つて語り伝えられる事も、又事実で有る。口遊（うわま）ものとなり、終に人の力で止める事が不可能なる場合も有る。未詳なる越翼を、いとおしく思う。この作なる雑記に若し読者が有ったな

ら、多々有る我が儘勝手や稚拙をお詫びし、何よりも声を限りに感謝  
申し上げる。

(1) 頼祺一「尾藤二洲の書翰(その一)」、『尾道短期大学研究紀要』  
一八、一九六九年、二二二頁。

(2) 頼祺一「近世後期朱子学派の研究」、溪水社、一九八六年。

(3) 頼祺一「前掲書(1)」、二二四頁。

(4) 頼惟勤「尾藤二洲について」、『徂徠學派』、日本思想史大系37、  
岩波書店、一九七二年、五三四頁。

(5) 前田一良「経験科学の誕生」、『岩波講座日本歴史』近世3、一  
九六三年。一八五、二〇〇頁。

有坂隆道「親試實驗主義の展開」、『ヒストリア』第八号、大阪  
歴史学会、五四―七十二頁。

# Bitō Jishū's Idea of Learning

Yasuhiro ISHIZU

This paper investigates Bitō Jishū's idea of learning, mainly by utilizing three primary sources. It aims to prove that his idea of the “principle of mastery through self-effort” (自力体得主義 *jiriki-taitoku-shugi*) is the same as the empiricism (親試実験 *shinshi-jikken*) of the “ancient medical practice” (古医方 *ko-ihō*).

---

**Key words;** Confucianism, Bitō Jishū, Learning through Self-effort, Gōda Kyūgo, *Shinshi-Jikken*